
屍ヶ台

骨休め

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屍ヶ台

【Nコード】

N7532X

【作者名】

骨休め

【あらすじ】

新婚の姉貴のマンションで始まった怪奇現象。児童虐待をする隣家の母親の仕業と信じて疑わない姉貴とそれに違和感を覚える俺。深夜の訪問者の目的は？ほんの150年前の日本で何が行われていたのか。人間はどんな罪を犯してきたのか。屍ヶ台と呼ばれる因習の土地で繰り広げられる事件を展開していきます。

姉貴の家の訪問者（前書き）

この作品にはグロイ表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さい。

姉貴の家の訪問者

1章 姉貴の家の訪問者

「もう、本当に腹が立つ！」

結婚して家を出ている姉貴の、今日の第一声はそれだった。

少し前から頻繁に実家に電話をするようになっていた。なんでも、新居として住み始めた賃貸マンションの隣室から、子どもを虐待するような怒鳴り声が、毎晩、響くのだという。

「深夜の1時とか2時に、延々1時間ぐらい喚き続けているのよ、その母親。異常すぎじゃない？」

そんな報告を聞けば、無関係な独身男の俺としても、なんとなく心がざわつくものである。

「児童相談所に通報すれば？」

無難ながらアドバイスすると、俺よりはるかに血気盛んな姉貴は、「隣の子をつかまえて学校とクラスを聞き出したから、まず小学校に連絡してみる。それと、隣の家の玄関先で、『いい加減にしてよね、毎晩毎晩！』って大声出してやったわ」

と鼻息を荒くした。苦笑しながら、でも俺としては隣人トラブルで刺されたりしねえだろうな、と心配になってみたりもした。

その姉貴の本日の怒りの要因はこれだ。

学校に連絡を取ってから数日、隣家の声は聞こえなくなった。一昨日には地区の民生委員も訪問していたそうだ。地域絡みで虐待阻止に乗り出したんだな、と安心した姉貴は、昨夜も達成感から健やかに熟睡していた。

深夜2時。なにかが聞こえたような気がして目を覚ました。夜中の物音には敏感になっていた。耳を澄ますと、ぼそぼそと喋る複数の人間の声が聞こえる。玄関先から。

仕事で疲れている旦那を起こす前に、正体を見極めてやろうとし

た姉貴は、こつそりと玄関に歩み寄った。覗き窓から外を覗くが、暗いばかりで動くものは見えない。声は途絶えている。気配もない。気のせいだったかと身を離れたとき、突然インターホンが鳴ったそうだ。重なるが深夜2時。尋常じゃない。

「ヘタレだと思うけど、怖くて玄関、開けられなかったわよ」
そう意気消沈する姉貴に、

「絶対開けんなよ」
と釘を刺して、その日の会話は終わった。

次の連絡は翌々日。

会社から帰ると、お袋が受話器を握り締めながら青い顔をしている。何かとそばに寄ると、姉貴からだという。精神的に弱いお袋と電話を換わった。

「俺。今、帰った。どうかしたの？」

「あ、リヨウちゃん？ちよっと気持ち悪いことになってるのよ」
姉貴は、珍しく取り乱した様子で、畳みかけた。

「一昨日、話した深夜のインターホンだけど、電話したその夜も昨日も、続けて2時から3時頃に鳴らされるの。カイさんに出てもらったんだけど、こつちの動きを察したみたいで逃げられた後だった。今夜も来そうで、ちよっと滅入ってるの」

カイさんというのは姉貴の旦那だ。大手の自動車部品会社に勤める技術者で、毎日のように帰りが遅いと姉貴がこぼしていた。

「今度は調べに行く前に警察を呼んだら？もしくは監視カメラつけようぜ」

そう提案すると、

「監視カメラかあ…。やってもいいけど、明日になっちゃうよね。今晚、カイさん出張でいないのよ。どうしよう…」
と答える。

結局、お袋の後押しもあって、俺はその晩、姉貴の家に泊まりに行くことになった。

引越しの手伝い以来、久々に訪ねた新居は、すでに綺麗に片付けられていた。姉貴はむしろ潔癖症に近い性格で、俺の部屋が汚れているのも我慢ができません、よく勝手に物を捨てられた。非難する俺を、

「部屋の汚れは心の汚れ！」

と汚物扱いしたのも、今となっては、なんだか懐かしい。

「一応、ここに入る前に隣の家の物音を探ってみただけど、怒鳴り声とかはしなかったぜ」

と開口1番に言うと、

「うん。声は聞こえなくなっただね。でも、だからって虐待が止んではと言いい切れないじゃない？非常識な嫌がらせするような母親なんだし」

と答える。姉貴は深夜の訪問者が隣家だと確信しているようだ。

「複数の人間の会話が聞こえたんだろ？隣って家族何人？」

「母親と小学生の女の子だけみたい。お父さんは見たことない」

その説明に、俺は首を傾げる。深夜2時、母子家庭にわざわざやってきて嫌がらせに加担する物好きがいるんだらうか。

「ふうん…。まあいいや。捕まえりゃはつきりするし」

そう言うと、姉貴はホッとした顔をして、

「よかった。リヨウちゃんが遅しくなってくれてて」

と微妙な表現で褒めた。

「あ、でも、番してくれるのは嬉しいけど煙草は吸わないでよ。お風呂の排水口の髪の毛はちゃんと拾ってね」

釘を刺すのも忘れない。

相変わらずうるせえなあ。それが人にモノを頼む態度か。

0時を回って姉貴が消灯の時間に入った。俺も明日の出勤のために眠っておかなければならないが、なんだか目が冴えてしまった。電気の消えた部屋の中で携帯をいじりながら、耳を澄ます。

隣家からは何のアクションもなかった。もしかしたら、この後の悪戯に備えて誰かが訪問して来るんじゃないかと疑ったが、気味が悪いぐらい静まり返っている。

「訪問者、か」

姉貴に聞こえない声量で呟く。なんとなくゾクツとする響きだ。相手の顔が見えないから無闇な想像をするんだろう。インターホンが鳴ってドアを開けたとき、そこにいるのが目を釣り上げて怒りの形相を顕わにした母親だったらOKなんだ。いや、それ以外ありえないか。姉貴はお節介だが、間違ったことをして他人の恨みを買うような奴じゃない。

少し眠気を感じ始めた俺は、布団を持って玄関先に移動した。音を聞き逃して、姉貴に、また明日から怖い思いをさせるのもアレだし。

…足音がした。ような気がした。

慎重に起き上がると、俺は手元の携帯を見た。時刻は2時を少し回っている。

狭い玄関を挟んだ先にドアがある。その向こうから、やっぱり何かの音がする。妙に乾いた響きだ。足音とは違う。布団から這いで、厚い鉄製のドアに耳をつけた。話し声はない。カシンカシン、と、耳慣れないそれは、移動する気配もなく、この家の前に留まっている。

枯れ枝でコンクリの床を叩くような音だな、と思った。水分の抜けた物体が奏でる軽い振動。わずかの衝撃で簡単に折れそうな脆い質感。

唐突に思い出した。大学時代、ワンダーフォーゲルの部活動をしていた俺は、2年生のひと夏、先輩に連れられて山岳救助に携わらせてもらった。天候の良い日に限り、行方不明者の捜索に山々を歩きまわる。一般的な登山者が行かないような深い谷や雪溪にも足を運んだ。

「こんなことしても見つかる可能性はほとんどないんだよね」

とあきらめムードのプロに混じつての搜索の結果、1体だけ遺体を見つけることができた。鮮やかな赤いリュックの傍らに、完全装備した服装を身につけたそれは、すでに皮も内蔵も残っていないかった。風化したスカスカの骨になっていた。

骨の音だ……。穴だらけの石灰質の棒の羅列を思い描いて、吐き気がこみ上げてきた。表にいるのは、本当は何なんだ？人間なのか？インターホンが鳴った。俺は飛び上がったと思う。ドアノブを掴もうとしたが、痺れたように腕が伸びない。人間じゃない。そうとしか思えなかった。人間の気配じゃない。

どれぐらいの時間、葛藤していたのか。

気づくと表の音はなくなっていた。それと入れ違いに室内から控えめな足音が近づいてくる。姉貴が不安そうな顔を覗かせた。

「いま、インターホン鳴らなかつた？」

俺は弾かれたようにドアを開けた。

共用通路の常夜灯が、すでに誰もいなくなったコンクリートの床を照らしているだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7532x/>

屍ヶ台

2011年10月20日02時09分発行